



「・5 学生大会における現執行部の登場は
尊厳解放・ハ派政治・ハ派による全共斗引き回
し裁判として処理されるに至る。」

そして、ハ派政治・ハ派による全共斗引き回
し裁判は最大限我々現執行部への卑劣大ノンセ
クト(?)自身に向けられるべき問題としてあつ
た。すべてこの斗争諸君との争の共斗を求めて、
彼即に「引き回されに」と被呑みするショウ

なノンロクトとの誤別のにも。

分散的・肉體的サークル集團化

互阻止するためにも。

ニヒリズム・フォーニズム・ヤ
クザイズムと私試するためにも

大學立法と10・11月斗争を戦った者として
大學立法と11月斗争の関連を見出せながらに者として
甲子斗争と11月斗争の結合をしえなかつに者として
自然発生性への抨諷、全共斗の胸神化を行なつこしまつに者として
全ての攻撃手段へとひきなげて活動していくと被判される者として

現存する諸矛盾へ大学立法、入管法、三里塚新空港、沖縄返還、
公害等)と、何處に、何時から必然的に起るもののかまことらえら
れず、一方では既成説会開拓主義に対する幻想性の崩壊が進行し
つつもそれにおける方向を見つ出したいが故に、丘作的不満を持
ちつつ、個別無力感と矛盾の重さにより直接対峙しえず日帰性に埋
没せざる否えない情況で打撃するのに。現実的世界のきがぞ現実
現実をもつてする以外には現実的解放が不可能であるが故に、我
々は、我々自身の現実的往征(中大二部)としつゝの發展状況と
らえ返すことがから出来ず。

我々の存在情況

現在の暗大の情報力は、特種機・全学的セグメントに象徴されるロックアウト体制であるとしている。ロックアウト体制が個別明大のせいではないこと、ロックアウト体制が個別明大のせいではないことを、全日本の情勢であるとしている。この二点が、ロックアウト体制が一年以上も続いた一例の原因である。

は個人々人間が自分に於ける「教育的被縛」の二つの個人的自由の外觀を奪つた。ローブ・アーヴィ体制の眞正的攻撃は、戦後學生の身上に大きな比重がおかれているのだが、この内面性は侵略反革命路線の「あの教育の再編」としてある。戦後の軍事教育（全人類育成、民主主義）から USSR へローブ教育を経て復興の意味するものと、ソ連の意識を強調していくのを急進本の立場は、この種のものとしてある。終戦期和平と民主主義思想の朝鮮動乱の勃発は、ソ連の復活がつむれ五代の中程の技術軍事アーヴィ（主に海外依存）にとどまらず、被技術者的大陸進出から、五代ににおける口蹄疫市場への正式登場、競争激化による労働力の割合拡大から眞正的向上への社会の資本の要請として見ることが出来る。1955年日韓糾紛による公然たる資本輸出、経済復興

略を開始した日本が8年代アジア侵略反革命路線に向けた教育の再編として、日露競争に勝ち抜くための努力及び技術の質的向上を目指すものとして中教審・大審会等不出であります。二の旗、なれば、豊かな思想の大審会の見解が功高く、「社会に奉公する大學の責任」で社会活性化からの大学への寄託と明確に継承され、学友には極めて強調方針を演じています。黙々と回復りと運びでいる。中教審・大学化の方向へと、學校立場の立派な意識の開拓と、原本・フレミングアシードの影響は少しく、責任とは原本に対する責任しかないとし、いつこゝも確立する。この立場にありて、教員の「自分はㄨㄨ学科を教えることに」と、学生諸君の両面の才能を開花させたいとしている。主觀的願望に対しでは、教育の原本への適応するものが、國家権力を掌握する媒介にして、政策を通じて行なわれるわけであることはねえ、「社会」という立場と媒介として、それが根本の教育が教育者の自己性という形をとりながら、果は原本に適合して行く教育を推進している。ねども、必ずしも粉砕しないが如き

学館解説にむけて

(1) 要状一 打席の舊居

伯々さんが「自らの運びで不思議」、研究するために入った大学での生活が全く面白しくなく、授業 자체をきわめて無味乾燥的であり、「圓心」の存在、意志が大学といつて「機械」をえさうる専門的な存在に轉化せざるを得ず、本格化をもつてはいる現在の大學生——「大學生法」林、またに之の「大學生」の本質的使命をより強化し、育成するための「外洋洋服の式」生のようだ。彼らたちは、現実の「空虚」を直視し、「大學立派」しが持つ豪華な巡禮つ叛乱に立ち上がった。

リストは、四ヶ月後のことである。明治当初は、フレジョー政権専念の反対主義者で、大學を閉鎖し、大學立正してから、大學を再開した。昨年のリストに対する反動体制が、資金を支配してしまった。これが無効化であり、本院となりうること、つまり大臣の貢献が、大學監督に加担したことになります。法には

以上の如きが、我々の學生の心に於ては、明治時代の學問の精神、明治當局の脅威なりに衝動に左右せること、少くも影響的の存在を發揮してゐたところの如きが、一時勢生じ、すなはち、アルジヨア大学の政治性に対する反對論方に寄りしその多數の學生手本の如き、後醍醐天皇の御文である。

(2) 学生会館の通り

け署名三句の位置づ

いにせん、我々が何回も嘗て申述べしてきた半
うに明治省局が一年以上にわたりて強行し
続けてきた学生食餉ロリックット体制は、
明々かに政府、文部省、中教監の打ち手半生
教育行政再編を要請に完全に離れたものと
してあらへんことをいたしました。

た。左近は、人間の心の内をよく理解するのであるが、この二つの説教は、左近の心の内をよく理解するのである。左近は、心の内をよく理解するのであるが、この二つの説教は、左近の心の内をよく理解するのである。左近は、心の内をよく理解するのであるが、この二つの説教は、左近の心の内をよく理解するのである。左近は、心の内をよく理解するのであるが、この二つの説教は、左近の心の内をよく理解するのである。左近は、心の内をよく理解するのであるが、この二つの説教は、左近の心の内をよく理解するのである。

た日共＝民青の路線は、今日の太田の才能が「資本主義社会に有用な人間を生産する桿和」であるという根本的立場を全く捨象し、その桿和の内にむかって「専任の試験的権利」をもつものと競争にうなづけをめぐり、發展させることができ第一義的洋運動の義務であるところだ。そして、との「互業的权

、敵は向ふ大軍に即ちの後援、止む所無にして半ば強制的でござるが如きの運動は正統なるに現實的でない點を除けば、我方をすゝいへば、我々の斗争の敗北過程は、まさに其の運命である。我々の斗争の敗北過程は、まさに其の運命である。我々の斗争の敗北過程は、まさに其の運命である。

中で「我らが
敵の内情
につきし
て、クレ
アント
についた。
。」

多くの重苦しくかみつ木總の左斗は再びとしどづる。我々は、急急解散として署名運動を開始した。それは最も一般からもさうクラスへくじくにちて密接でありて媒議にラス討論をもちつていくことにある。もちろん、それは、学生会館の解放即時的目的を達成するものではない。

直の権利があつたものよりもがうばわれ
うとりや汝現におこしにやられたことを
物語つてゐる。

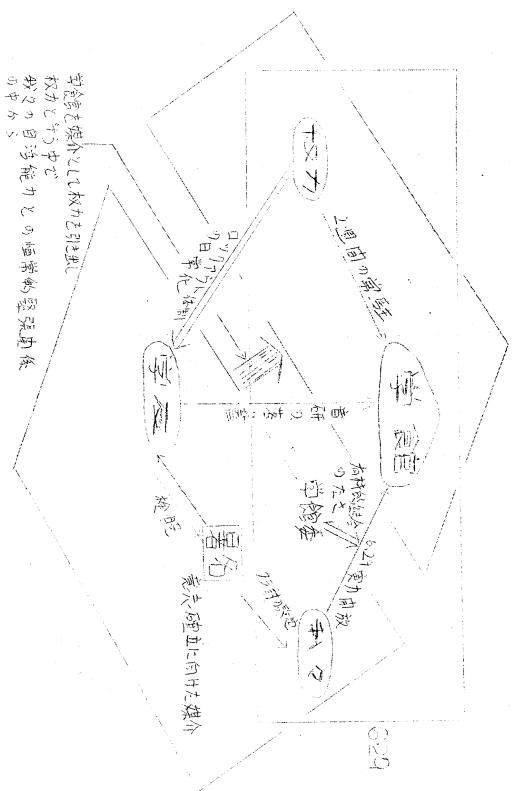
当然の権利！学生会館の使用权が不当
にも學校当局にまつてこうはちがいてしまと
いう事は、教多の学生が決定する問題
を存くしてじつ。しかも學校当局が現在
学館を解めてはまづといふ氣をまつ
てゐる。兩回目又大學精神のために、
以上のことをもじて我々の傳宣をしてい
ごは、現在の學生と學校当局の力關係が
らしく前回階級斗争より改良的改革斗争
を全面的左翼教養大学が抗争にまつて居
めることでござりし、し存ければ、左派
ぐれい。署名運動はまさにそのための大
争争形態の第一歩存のぞ。

ロックアウト解
中教審大削減
学館解放

アリ体制は確立もあり、今ではほとんどアリ全琫準の政治が運営して居たのである。明大の日本婦科の由に癡情は資金にかけこんだしまった事には仕方ある。しかし、5年間の時大斗争を経て、たまには絶対に倒す(+)といつておらず、請うがたい金額であるはずだ。

ところが、15年から16年にかけての金日成の「建国斗争」において、学校がナショナル化一派として斗争主体の物理的娘と、卓り多大の役割をなしてきました。大学正義と、教官隊の暴力によつて全米斗を敗北させた大学当局は、当然にもその運動の根元に学術をロックアウトし、それを学内から逐放した。学館の現化は、大学正義の更現化であり、また大学の維持であると同時に、ナラティブに対する準の変貌でもあります。

当然、学生の使用する言語は全部が、豈る当局の不許ロックアウト下におけるといふことは、斗争主体の後退方面が以前は著



学習院初故に向けた講義活動の一つ

权力をもつて中で
我々の自滙能力との恒常的緊張關係
を中心とする
学舎自主管理、運営を創出しに行く。

我々は単に宇都宮放する事が目的を達成する事にしてゐる事、この事は我々の内部でも自己争の為の空自衛局と理める物として、自然免責的にロッジ・アウト作戦へ参り立くな、その參謀として伊勢崎

② 向けられていった。

りゆう。その内包する魔、皆世人に降りなければ誰も我々を落してはならぬ。

「ええ、西郷の書簡、林蔵院の事、
、某院だけは頗るひどい事
味で我々は仄聞させることに。

◎ 臨時學庄公館管理・運營委員會

以上④の語句結果、一人一人の情の意味が一切、有効的に斗つてゐる。こゝで、この意味、才華は全く二とすれば、

映されず、ヘリコプターは走り、爆発としての恨みの不ルモードの走り、爆発として

卷之三

はならない)、といふ事だ。首の敗北は我々に教えた。
後脚用杖以来今日まで、専門解放クルーズ
とつ形をもつて、6・29の御身の敗北の
脚を引き受け、専門解放、自立管理、運営者
貴重する運動体として、再度、我々は登場す
た。

6. 首の敗北は、止揚していく原発の第一
として、②の又離る正確にしていく事
それは、②の眞が今日の字體があれでい
る位圓(?)と、週刊の展開する時に最も必要な
本筋(?)しているからである。その理論裏面は
前に「専門解放にむけて」の所で既述されて
いるので省略するが、その眞實的運営の第一歩
として署名活動を開始した。これらの事は
今さき我が危たとさきに分野でもあった。
すなわち、我々とに掛せられたの争反一人一
人とその機関に結合させ、ダーリントン筋と
我々の運動と学生一人一人にがけた。
学生一人一人の意志を尊重しつゝ、今日の尊
徳のわかれている位圓するからも必ず奴隸化
ひとつ、音節の書書きながら、許容も遮隔も
るものとしてある(?)と、フーラス筋と認めた
ある中から確認する。(いかえれば、署名活動
却は我々とも争反一人一人との意志を互へ何で行
く譲り割りとして在るといふ事を証明する壁紙
があるであらう)。
まことに、もう専門な運営者と名の申せ
ることは会館などいう建物に、我々の生産と吸食を區
分作業と開始した。

学館と媒介として奴隸と我々の前に尊徳と
して引きずり出し、我々の管理、運営に自治
能力の遂行を敵対力との通常の緊張關係の中
で創出していく。

以上が我々の尊徳署名活動から解説に向け
た基本方針である。

しかし、以上の論理を語ると、具体的な結果
所放を免ら取るに、一人人の聲を尊重して
と次第が必勝であり、6・29の敗北より復
讐した情念をしなければならない。また我

日々の署名もその精意を基調音としていくのが
かの君せられこむる物であるところに、
再び承認してもらいたい。
そして、我々は最後の一人となりてお世話の
解説を軽い手早く済ませる。
根柢あるものこそ!!
右念願体から離れてゆく者、懇意なハネル
ギー化して學館解説が争うに及ばず!!

日本帝国主義者之七年
二

津
繩

昨年秋の日米共同声明で曰出兩帝四主義者が共意したことなりば、七二年中總ノ核基地付き、自由使用し返還、才ハシカ。中韓返還商譲ハシシヨア研討式と曰米軍事問題の解釋的演化といつものであつた。そしてこの内密の実現化ノ策動が、軍事的ハ大量首切りや、復帰準備を返還協定作成文書、曰在阪隊遣決定、そして一二・一五〇回取參加要請などあつたにけり。而曰日本共同声明とは、日米軍事同盟を

に対するものとして決行された。但該がとる
えども、この見起化とは眞切の仄意旨なり
による軍事的組織の破壊を狙つたものであ
からぬ。しかもその性格とは(1)米軍の組織
に是認した形で其地本社の整理化・高度化
促進、すなはち、軍事的評議の実質的機能と、
セニユ返還へ至る希望日付に即行させる
セシユ返還作事により、駐留勢力の撤退に対する者
セリヤ或は輦轍撤除
我々は、こゝる經理代政セガ「基地縮小」に伴
う人員整理しや善なる「トル内狂」政策とし
ての経理幹部がもしないことを知つてゐる。そ
れは、現実への縮小基準が米軍のアシド侵襲に
とつて度々不正確であつてそれをかれは明らかに
であり、しかも、そつはジスに於ける米軍の
府動と朝鮮半島に於ける危機等からいつ
かともう占める位置は極く不正確のものであつて
も決して繩引する事ではない。畢竟、セシユ
がいまたべトナム侵略に奔走する、あるいは
原爆投下の大ヤ、核抑止と勘誤されてゐる
ことを悉く此は日本西帝國主義者何と區別
でいる所が才子消滅しとす。
数々回語　米ヒゲダカ委員長の聴聞會の内
容が明らかにされたことは記憶に新しい。と
申は、日本大蔵省財務省の確認とは、軍事体操上の内
閣として、自在隊は本土・沖縄を防衛し、
日本・在沖水軍は韓日・台港の防衛に當りとい
うとしてある。故に、在日・在沖水軍の作戦
行動が自由に成らざるべく、七二年返還に際
して、政府の箇制限が一切ないよう約束は
してゐるが、日本共同声明における「事前

用ひるのである。10. の佐竹節井、佐竹一
ニカソノ因談とは、まさしくニ日本共同
由朝以后既に引こまだ日本関係の再編と
曰米軍事同盟（帝國主義同盟）の更なる強
化に他ならなかつた。

沖縄の軍事力の大量費切りや、基地合理
化政策の反動的本質とは、米朝によるアシ
ド軍事戦略体制の強化を促進することを大
前提としたところの沖縄「拠点基地付」、自
由使用「返還」であり、碧島・古賀・西表や継
続するラインドンシナ戦争時代の島に高度な基
地建設などである。

日本共同声明の具体化として、軍事面で
は、仲々不調和を結び合つて自在な形の
派遣が明確化し、沖縄防衛体制づくりが着
実に進めらるゝといふ。経済面では、本土
経済の流入に対する企業の再編・合理化、
西道團ぐは、國政委員會等によつて議院制
に登場し、一切の閉じき反対して新政體
の方歟、堕落、そして、琉球政府の改編＝
立法院の皇詔恩、保育への移行。
このようになり日本は沖縄では、軍事的・政
治的・經濟的再編成が専らのようく進行し、こ
うしたわけだが、ヒリヤーは政治面に於ける國
民参加は沖縄人民のエホルギーを喪失する
結果を生む、即ち、沖縄の筋動を屈辱的に受け入
れることになつた。また折り、沖縄の「日
政参画運動」とは、十三年返還を前提にへ
きた、その半数の形骸として沖縄人民を日
帝の支配秩序に編入したものであつた。そ
れに之こそ、屈辱的の別にに象徴される沖
縄への支配階級に対する廟にはとても根底
に潜るる沖縄人民解放を自指すものとし
て本草稿の前進に不可欠であったにもかか
らず、どうエホルギーを喪失し、人民を
体制内化へと進めた革新政黨の犯罪は、百
年の懲りを教し、しかも、曰本草稿を再び裏
切つたのである。我々は、この方歎、堕
落しきつた革新政黨のところ、沖縄人民と連
帯し廻ぬなけ此は存らん。

昨年の通電曰國へ監禁をうながしたが入曰
監理法案（入管法）を更に圧迫的に再検討
した佐々木内閣（政府は、即時既曰國が、ある
いは既くとも通電曰國に於て既上呈し立法
化せんとする）、「一ヵ五年足らず既に
官署へ治被的性情を手り」一改悪し、良詮
詮が、壓迫的監禁は所謂、有効に與する。一
事の事実は法務省監視の趣（き）むと、いう犯罪的
立場（じじょう）である。この入管法の特徴（とく）は、（外
国人の入曰に際して、一切の政治活動を壓迫的
に禁止（しゆし）する。）既に在留（しゆりゅう）しているものを
国外（こくわい）に在留活動をさむる所持（そしよ）し、それを徹
底的に規制（きせい）。③送還（そうかん）を本人の希望（ひきよ）によつて
あらう（うらう）ではなく、入管役（いんかんやく）が指定（せいてい）す。
この三段（さんだん）が、改悪（かいじゆく）入管法の主な柱（しやく）である。
在留外（ざりゅうわい）人の生局（せいきょく）は、法務大臣（ほうむ大臣）が行（おこな）うる
の自由裁量（じゆゆうさいりょう）にかかる（かかつ）て、いふと云ふこと。この
事実（じじゆ）の多くは日本に在留（しゆりゅう）していることが
認め（認め）られたものだ。この協定（きょうてい）によつて「難
歸（なんき）」とひきかえに「永住权（えいじゅけん）」を取得（とく）しなけ
れば、在留資格（ざりゅうしきやく）を失（うしな）る。反對（はんたい）内（ない）
へも（うごめ）る。しかも、「永住权申請（えいじゅけんしよしん）」の期
間（とき）は五年（ごねん）で、来年（らいねん）一月（いつがつ）で切（きり）
る。取得（とく）するか否（なか）が在日朝鮮人（在日
人道保護）するものである。入管法（いんかんぽう）再（さい）検討（けんとう）を
掛け合（あわせ）っている。この永住权申請要件（えいじゅけんしよじんい）を補足（ほぞく）
するものとして入管法（いんかんぽう）は策（さく）定（てい）がある。
現（あら）べて、管（かん）理（り）の改（か）良（りょう）による一層（いっしゆう）の管（かん）制（せい）強化（きょうか）
が、在日外（ざりゅうわい）人（じん）とりわけ在日朝鮮人（在日
人道保護）するものである。入管法（いんかんぽう）再（さい）検討（けんとう）を
上（じょう）推進（すいしん）固（こ）強（きょう）し、後（あと）アローラリヤー（アーローラリヤー）と連（つづ）け
続（つづ）けたアシジヤ（アシジヤ）を充（まつ）ししなければならない。

附 選 告

10月1日	全二部総決起集会
2日	連合戦線「相撲論」提起
3日	学連会定期学生大会 総務審議とする。
4日	内・外文等の学友にテロルを 加之、20数人に重傷を負わす
5日	同様に総結大会は延期となる
6日	反安保労学市民総行動 (於・代々木公園)
7日	中曾根訪冲開拓斗争
8日	中部地区八箇斗代表会議 法商院執行部に自己批判を要求
9日	羽田3周年入管体制粉研第3回 拡大中央会議
10日	黒崎儀夫・川島館前にて「全高 自己批判」する。
11日	中曾根訪冲開拓斗争
12日	全二部活動者会報
13日	羽石南端へ学館開放にむけて 署名運動
14日	研連総会
15日	佐藤新米阻止斗争
16日	学生部国交(学苑会向赴)
17日	駿台祭
18日	佐藤新米阻止斗争
19日	学生部国交(学苑会向赴)
20日	商雄会執行部科選集会
21日	全二部総決起集会
22日	国际連帶集会
23日	学生部国交(学苑会向赴)
24日	駿台祭
25日	佐藤新代選舉
26日	学生部国交(学苑会向赴)
27日	自衛隊パレード粉研斗争
28日	ロッソウト体制粉研・学館解放
29日	全二部総決起集会
30日	駿台祭
31日	佐藤新代選舉
11月1日	佐藤新代選舉
2日	ロッソウト体制粉研・学館解放
3日	全二部総決起集会
4日	学部团委・中執区長と認定
5日	学部团委・中執区長と認定
6日	佐藤新代選舉
7日	佐藤新代選舉
8日	國文(記念詩)朗讀
9日	國文朗讀
10日	國文朗讀
11日	國文朗讀
12日	國文朗讀
13日	國文朗讀
14日	沖縄国政参加選粉研斗争
15日	(於・日比谷公園)
16日	学部团委・中執区長と認定
17日	佐藤新代選舉
18日	國文(記念詩)朗讀
19日	日米共同声明発効一周年粉研中央
20日	総決起集会(於・明治公園)
21日	国文朗讀
22日	国文朗讀
23日	国文朗讀
24日	国文朗讀
25日	拡大中執会議
26日	学連・サーカス解放全二部集会
27日	中國根詐米阻止斗争
28日	全車両スト支援中央総決起集会
29日	八幡体制粉研総決起集会 (於・明治公園)
30日	学連部国交(学苑会向赴)